

の頃一日が日本金五錢、即ち五錢白銅一個あれば一日の生活が出来た、そこで一日の勞銀は三十錢位、三十錢あれば六日間の生活費はある、だから一日働いては五日間位休み、その間はばくちばかりやつてゐる、たごへ仕事の間でも、少しでも監督が緩くなるご忽ち物蔭にかくれてばくちをやる、ごいふ風であつた。

私達が朝鮮へ渡る時に乗つた船は大禮丸ごいふ船であつたが、何しろ日露講話條約はまだ開始せられず、ロシヤ艦隊は日本海々戦で大體全滅したごは云へ、物騒千萬なごきであ

つた、私の乗つてゐた大禮丸も朝鮮海峡にさしかゝるご、折から夜の闇は海面を包んでゐた、ご、後の方から何艦ごも知れずサーチライトを照らしながら追ひかけて來たごそこで大禮丸はすつかり燈火を消して千鳥形に航路をこつて、六連島まで引返して來た、後で聞いてみて分つたごだが、追かけて來た船は、我が高千穂であつたさうだ、まあそんなごが今ごなつては懷舊心をそゝるだけである。燈臺のごに關しては當時の工學會誌に詳しく掲載報導した。

明治二十四年十月の濃尾大地震の岐阜縣西春井郡小田井村十四番戸、神野泰次郎宅隣接の竹藪破壊、凡そ十五間前面の小川(幅二間)を越え位置を轉じたる景。

Changed its location beyond a brook (12 ft. l wide) which is about 90 ft. from origina place, destroying a bamboo-jungle.

